

〔I〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。なお、字数指定のある問いでは、句読点・記号も字数に数える。

自分を発見すること。世界と出会うこと。この二つは（ 1 ）の出来事だ。世界と出会うことによつて改めて自分を発見しなおす、と言つてもよい。

「世界と出会う」とは、もう少し詳しく言うところ「自分にとつて手も足も出ないような、人間のスケールを超えた、ある ^A 大きな力と出会う」ことだ。そういう経験がきつと皆さんにもあると思う。まだないという人も、近いうちにきつとある。「大きな力」とは何なのか、人によつて違ふだろうが、それに出会う瞬間は必ず訪れるにちがいない。

しかし、自分の狭い殻に閉じこもつていては、そういう機会が訪れても気づくことができない。だから、自分をバリアで囲い込むのではなく、何か大きな力と出会う機会に向けて、常に自分を開いていてほしい。

「自分」はつねに「世界」のさまざまな波打ち際と接している。その波打ち際はいつも近くにある。それに向けて自分を開いておく。開く勇氣を持つ。

たしかに、大きな津波が来たらどうするのか。逃げられないではないか。とすると「^B世界の波打ち際に向けて自分を開く」のは一見、怖いこと、危険なことのように思えるかもしれない。

でも、そうではない。

東日本大震災の大津波では、^①防波堤を人工的に築いても役にたたないことがわかった。でもそれはコンクリートの防波堤を超える高さで威力の津波が来たからで、もっと高くても防波堤を築くべきだ、という判断がいまだにある。けれども、本当にそうだろうか？ そんな教訓でよいのだろうか？

私たちは海という巨大な^②ナゾの世界と、自分たちが住んでいる見知った街を、防波堤という境界で分断してしまった。（ 2 ）、バリアを築いて自分たちを囲い込んでしまった。そう考えてみてはどうだろう。

かつて海辺で暮らしていた人々は、海を通じて世界と対面していた。海の色、潮の匂い、波の音や高さ。これらはすべて情報のアーカイブ^注だった。それを読み解けば、天候がどんなふうに変化するか、いつ、どのくらいの大きさの波が来るかがわかった。つまり海という巨大なナゾの世界からのシグナルをキャッチできた。それは長い時間のなかで知らず知らずに身についた知恵だ。

ところが、海と人との間に巨大なコンクリートの壁を築いたらどうなるか。そうした自然がもたらす情報は遮断されてしまう。人間が海と対話することができなくなってしまふ。天候の

変化も、津波の危険性も^③察知できない。やがて海からのシグナルをキャッチする感受性は失われていく。人は生きるための大切な知恵の一つを捨ててしまったのだ。

だから皆さんに言いたい。自分を開くのは決して無防備な仕草ではない。^c 外の世界から発信されているさまざまな信号や情報を全身で受け止める。それは、自然に向けても社会に向いても自己を開放し、対話することなのだ。その行動を恐れてはいけない。

(中略)

ファールブルの『昆虫記』は知っていると思う。僕も皆さんくらいの頃に虫を通じてジャン＝アンリ・ファールブル（一八二三～一九一五）の本に出会った。ファールブルはおもしろい人で、いくなれば権威に対する^D反逆者だった。

当時のヨーロッパはチャールズ・ダーウィン（一八〇九～一八八二）の進化論が権威を持ち始めていた時期だ。生物が自然環境との関わりの中で共通の祖先から長い時間をかけて変化してきたことを明らかにした進化論は、学問的には一つの大発見だった。

ところがファールブルは『昆虫記』で「進化論にお灸を据える」というタイトルの一章を書いている。ダーウィンの進化論は自然の実態とかけ離れた観念的な理論にすぎないのではないか。それがファールブルの意見だ。

『昆虫記』にあるように、ファールブルは南フランスの野山で小さな昆虫たちの生態を^④テツテイ的に観察した。

例えばハチの仲間でも種類が違えば食べているものも全く違う。昆虫たちが自然の中で生きている多種多様な姿をありのまま、事細かに調べ続けていたファールブルにとって、ダーウィンの学説はあまりにも抽象的な^E机上の空論に見えたのだろう。ファールブルはかなり本質的にダーウィンを批判している。

結局、今に至るも学問としてはダーウィンの進化論は生物学の正統であり続け、ファールブルは自然観察家としては有名だが、学問的にはあまり評価されていない。それでよいのだろうか？ ファールブルを（3）として再評価するのは興味深いテーマだ。皆さんの中からそんなテーマに挑戦する人が出てくることを期待したい。

しかもファールブルは生物学だけの人ではない。詩人であり、作曲家でもあった。それから、南フランスのオック語という古い少数言語が消滅しかけているのを心配して、保護運動にも乗り出した。九二歳まで長生きした人だから、いろんなことをやっている。生涯を通じてアカデミズム（大学など学問の権威的な世界）の外にいた人で、反骨精神、批判精神が非常に強い。

今から振り返ると、僕は虫の世界を通じてファールブルの^Fそうした存在に惹かれていたよう

な気がする。僕自身ものに、学問の形式的な^⑤枠組みからどんどん離れていってしまった。自分の中では一貫した情熱と探求心があるのだけれど、外からみると僕のやり方は決められた枠からはみだし、公式的な学問の道から外れてどこか遠くへ^⑥ホウロウしていったように見えるらしい。そうした動き方には、もしかしたら少年期に出会ったファースブルの影響が強いのかも
しれない。

（今福龍太「学問の殻を破る——世界に向けて自己を開放すること」『何のために「学ぶ」のか』所収より。

ただし、一部改変してある。）

注 アーカイブ——「もはや日常では使用しないが、後年利用するために保管される書類」という意味から「保存された記録」。

問一 傍線②・④・⑥のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線①・③・⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三 空欄（ 1 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 大同小異 イ 虚々実々 ウ 臨機応変 エ 以心伝心 オ 表裏一体

問四 傍線A「大きな」の品詞は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 副詞 イ 連体詞 ウ 形容詞 エ 形容動詞 オ 助動詞

問五 傍線B「世界の波打ち際に向けて自分を開く」とはどういうことか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 世界の自然や社会からのシグナルをキャッチできる感受性を持つこと。
イ 世界の自然や社会と自分との境界に強固なバリアを築いて分断すること。
ウ 世界の自然や社会に向けて自分を開放していくことに恐れを持つこと。
エ 世界の自然や社会から発せられる信号を無防備に受け止めること。
オ 世界の自然や社会からの情報を自分で読み解く知恵を捨てること。

問六 空欄（ 2 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア それで イ さらに ウ あるいは エ つまり オ または

問七 傍線C「外の世界から発信されているさまざまな信号や情報」の具体例を示している語句を文章中から十五字で探し、記入しなさい。

問八 傍線D「反逆」の熟語の構成の説明として最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 同義語の関係 イ 修飾・被修飾の関係 ウ 主語と述語の関係
エ 動詞と目的語の関係 オ 反対語の関係

問九 傍線E「机上の空論」の意味は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア あいまいでまだ完成されていない部分があること。
イ 頭の中だけで考え出した、実際の役には立たない理論や考えのこと。
ウ はつきりしていなくて疑わしい理論や考えのこと。
エ 理論が成り立っておらず、実現不可能であること。
オ 意外性があり、ほとんど夢想に近い理論や考えのこと。

問十 （ 3 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 芸術家 イ 批評家 ウ 学者 エ 反逆者 オ 権威

（次のページに続きます）

問十一 傍線F「そうした存在」とはどのような存在か、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 生物の自然観察以外にもいろんなことをやり、学問的な評価に興味を示さずアカデミズムを超越した存在。

イ 小さな昆虫たちの姿を事細かに調べ続け、自然の実態とかけ離れた観念的な理論には無関心だった存在。

ウ 自然観察に一貫した情熱と探求心を持ち続け、決められた学問の枠からはみだしてしまった存在。

エ 専門以外にもいろんなことをやり、権威的な世界の外で反骨精神や批判精神を発揮した存在。

オ 昆虫たちが自然の中で生きている姿を一貫して観察し、公式的な学問の道からは外れてしまった存在。

問十二 この文章の前半の要旨として最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 自然や社会に向けて自分を無防備に開いてはいけませんが、人間のスケールを超えた大きな力と出会えるような勇氣を持ってほしい。

イ 大津波のような自然の大きな力の前では人工の物は役にたたなかったが、だからこそもっと強固な物を作って自然の脅威に備えるべきだ。

ウ 自然と人間を分断することは、バリアを築いて自分たちを囲い込むことにつながり、自然がもたらす情報は遮断されてしまう。

エ 自然や社会に向けて自己を開放し対話することを恐れず、それから得た情報をキャッチする感受性を養い、生きるための大切な知恵を身に付けてほしい。

オ 自分を開くのは決して無防備な仕草ではないが、人間には抵抗できない大きな力が存在するのも事実であり、危険を伴うことを忘れてはいけない。

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。なお、字数指定のある問いでは、句読点・記号も字数に数える。

わたしたちの身体は、自己完結した「閉じたシステム」ではなく、むしろ外に開いた「オープンなシステム」なのではないのか……。『えっ、それってどういうこと？』という学生たちのキョトンとした顔を見無視して、どんどん先に話を進めてしまおうという手もあるけれど、ここではちよつと立ち止まって、もう一つの例について考えてみよう。^{注一}

教習所などでクルマの運転を習いはじめたころの感覚をまだ覚えているだろうか。大学生であれば、ちょうど教習所に通いはじめているころかもしれない。クルマのなかに乗り込み、まずシートベルトを締める。そして右足がちゃんとブレーキを踏んでいることを確認し、エンジンをスタートさせる。あとは前後左右の安全を確認して、いよいよクルマを動かすだけだ。でも、そこでなぜだかドキドキしてしまう。

このクルマはどのようなサイズなのか、どのような状態で置かれているのか。(a)はまだしも、(b)になると、それがどのような大きさなのか^①皆目見当がつかない。クルマの外から見ていたときにはとてもコンパクトに見えていたものが、そのなかに入り込んでみると、クルマの^②リンクはぼんやりとしてつかめないのだ。

それとアクセルはどんな感じで踏み込めばいいのか、急に走りだしたりしないのだろうか、とても不安になる。そこではなにか自分には(1)ような、とても大きな身体を抱え込んでしまったような気になる。こんな^③ヤツカイなものをほんとうに操れるものなのか……。

ゆっくりと深呼吸をしてから、おそろおそろブレーキを緩め、アクセルに足をかけてみる。すると、クルマの窓から見えている景観がゆっくりと動きだした。その景観の一部は、(c)からこちら側に近づき、そして両脇を抜けるようにして(d)へと去っていく。今度は、(e)から白線が近づいてくるのに合わせて、ブレーキを踏んでみると、その白線の近づいてくる動きも静かに止まる。

こうしたことをくりかえすうちに、クルマを操るコツがすこしずつわかってくる。つまり、クルマを動かすには、その景観の流れを動かし、クルマを止めるには、その流れを止める。あれっ？ これはいったいどういうことなのか。

普通は、クルマを動かす時には、そのクルマを直接動かせばいいじゃないかと考える。そして、クルマを止めるには、やはりその動きを止めればいいはず、と。(2)^A自分の力だけでなんとかクルマを操作してみようとするとなかなかうまくいかない。

^Bクルマを前方に進めるのはまだしも、いわゆる縦列^{注二}駐車とか、車庫入れと呼ばれる操作になると簡単にはいかない。「えっとー、まずギアをバックに入れるだろ……。それで、ハンドルを

右に回すと、クルマの前方は左に動いて、そのままバックをするならば、後方は右に寄るの、それとも左？……」

ハンドルを左右に動かす意味を頭のなかで一つひとつ考えているあいだは、クルマの運転はなかなか上達しそうにない。そこでじつと考え込んでいても、そのハンドルを左右に動かす意味を知ることができない。

そんなとき、わたしたちはどうしているのか。じつと考え込んでいてもはじまらないので、とりあえずハンドルを左右に動かしながら、アクセルを踏んでみることにする。どうなってしまうかわからないとドキドキしつつも、その意味を周囲に^④委ねてみる。すると、ハンドルの動きに合わせた周囲の^C見えの変化がそのハンドルを動かすことの意味を直接教えてくれる。

自分の内側からは自分の姿が見えないように、いま自分はどんな状態にあるのか、どこに進もうとしているのか、自分のなかからはじゅうぶんに^⑤把握できない。同様に、^D自分の行為の意味なのに、自分のなかに閉じていては知りえない。なんとも心もとないことなのだけれど、そうした制約というか、自らの〈不完結さ〉を、わたしたちを取り囲んでいる周囲を味方につけながら克服しているようなのだ。

いわゆるクルマを運転するコツは、自分の力だけでクルマを操りたいというこだわりを捨てて、自分の行為をいったんは周囲に委ね、結果としてその周囲からナビゲートしてもらうという方略への^⑥テンカンにありそうだ。そこでのポイントは、周囲と一緒に「一つのシステム」を作りながらクルマを操るというスタンスを取れるかどうかだろう。

たぶん教習所を修了するころには、^Eそんなことさえも気になけなくなる。バックミラーを眺めながら、その見えの変化を手がかりに、^Fなにげなくハンドルを回しているにちがいない。そのクルマはいつの間にか、自らの身体の一部になっていくことだろう。

（岡田美智男『弱いロボット』の思考 わたし・身体・コミュニケーション』より。

ただし、一部改変してある。）

注一 もう一つの例——筆者はこの文章の前に、一人の旅行者の目線からのカメラワークに徹して制作された旅番組を例にして述べている。

注二 縦列駐車——縦一列に並んで駐車してあるクルマとクルマの間のスペースに、さらにクルマを駐車すること。

問一 傍線②・③・⑥のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線①・④・⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問三 空欄（a）～（e）に入る語の組み合わせとして最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|
| ア | a 後方 | b 前方 | c 後方 | d 前方 | e 後方 |
| イ | a 前方 | b 後方 | c 後方 | d 前方 | e 前方 |
| ウ | a 後方 | b 前方 | c 前方 | d 後方 | e 前方 |
| エ | a 前方 | b 後方 | c 前方 | d 後方 | e 前方 |
| オ | a 前方 | b 前方 | c 後方 | d 後方 | e 前方 |

問四 空欄（1）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| ア | くちおしい | イ | そぐわない | ウ | こそばゆい | エ | ふつつかな |
| オ | かなわない | | | | | | |

問五 空欄（2）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-----|---|------|---|------|
| ア | たとえば | イ | そして | ウ | だから | エ | あるいは | オ | ところが |
|---|------|---|-----|---|-----|---|------|---|------|

問六 傍線A「自分の力」の対義として考えられる語はこの文章では次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | クルマの力 | イ | 仲間の力 | ウ | 周囲の力 | エ | 他人の力 | オ | 機械の力 |
|---|-------|---|------|---|------|---|------|---|------|

問七 傍線B「クルマを前方に進めるのはまだしも、いわゆる縦列駐車とか、車庫入れと呼ばれる操作になると簡単にはいかない」のはなぜか、「くから。」で終わるかたちで文章中から二十九字で探し、記入しなさい。

問八 傍線C「見え」の文法的な説明として、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 下一段動詞「見える」の連用形が名詞化したもの。
- イ 下一段動詞「見える」の連体形が名詞に転成したもの。
- ウ 上一段動詞「見える」の連用形が体言化したもの。
- エ 上一段動詞「見える」の連用中止形が名詞的な扱いを受けたもの。
- オ 下一段動詞「見える」の連体形がそれに続く形式名詞を省いて使われたもの。

問九 傍線D「自分の行為の意味なのに、自分のなかに閉じていては知りえない」とはクルマの運転ではどういふことか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア クルマの運転をなぜ行うのかという意味をもった疑問であるのに、自分の内側から見ているだけではその理由を知ることができない。
- イ ハンドルやアクセルを自分で操作することの意味は、自分の手や足の動きを自分自身で感じないではわかりえない。
- ウ ハンドルを右あるいは左に動かすという自分の動作の意味なのに、窓の外のもの動きが見えない状態では何をしているのかよくわからない。
- エ ハンドルやアクセルを操作することの意味を直接教えてもらったはずなのに、自分の座席に閉じこもっているからちつともわからない。
- オ クルマの運転をするという自分の行為の意味であっても、その動作を周囲に委ねる謙虚な姿勢を失っては自分が運転する意味をとらえることができない。

問十 傍線E「そんなこと」とはどのようなことか、適さないものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 周囲を味方につけながらクルマを運転するというコツを会得すること
- イ 自分の力だけでクルマを操りたいというこだわりを捨てること
- ウ 自分の行為をいったん周囲に委ね、周囲からナビゲートしてもらうようにすること
- エ 周囲と一緒にクルマを操るといふスタンスを取ること
- オ 教習所を修了するまでに運転のポイントを知ることができるかどうかということ

問十一 傍線F「なにげなく」とはどういう様子か、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 適当にハンドルやアクセルを操作していれば、自らの〈不完結さ〉はしだいに克服されていくだろうと楽観的にとらえている様子。

イ 自らの〈不完結さ〉を、周囲を味方につけながら克服して、いちいち考えなくても操作できる様子。

ウ 周囲と一体化することによって、自らの〈不完結さ〉を隠蔽することができ、完全無欠な姿になって堂々としている様子。

エ 人間というものの〈不完結さ〉を、わたしたちを取り囲んでいる周囲とともに克服し、安堵^{あんど}している様子。

オ クルマの〈不完結さ〉と人間の〈不完結さ〉とが、互いに補い合って、安心して完全に運転している様子。

問十二 この文章の構成として最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 最初に意見を述べ、その後に根拠となる例をいくつも挙げている。

イ 最初に事実を述べ、その後に事実を支える出来事を述べている。

ウ 最初に反対意見を述べ、その後に自分の意見を述べている。

エ 最初に結論を述べ、その後に具体例を用いて説明している。

オ 最初に問題を提起し、その後に問題を論理的に解決している。

國語

解答用紙

$$\mathbb{I}$$
[illegible]

受験番号	
------	--



国語

解答用紙二

〔Ⅱ〕

問十二	問十一	問十	問九	問八	問七		問六	問五	問四	問三	問二	問一
											①	②
					から。							
											④	③
											ね	
											⑤	⑥

受験番号		★ ★
------	--	--------